

サギ男は平凡な顔

にこにこと笑いながら私に近寄って来た男がいた。私と同年配か少し若いかな。

「しばらくだね」と彼が言う。確かにどこかで見知っている気がするのだが、思い出せない。元々、人の顔やら名前やらを覚えるのはニガ手なのだが、こう親しく声をかけられた時が一番困る。

いつもなら私も「やあ元気？」などとさり気ない声だけかけてすれ違うのだが、彼は立ち話を始めてしまった。でも、どうしても、どこで知りあった人だったのか思い出せない。

《あなたはどなたで私とはどんな知り合いでしたっけ》などとは中々聞けないものなのだ。

と、彼は矢庭に持っていたバッグを開けて「ほら」と私に中を見せた。驚いた。中味は一万円札を十枚ずつにしたらしい束が幾十か入っている。数百万円はあるだろう。

立ち話の場所は地下鉄のコンコース。ひっきりなしに人が脇を通り過ぎている。「実は知り合いに競馬の穴を教えてもらって。謝礼を一割払って残りがこれだけだ」彼は声をひそめながら云う。「どう？立ち話もなんだから、近くで一杯やらないか。」彼が私を誘った。そんな時、気持が引くのは私のクセ。「折角だけれど、人に会う約束がある。大金なんだし、さっさと家に帰ったほうがいいよ」

ひどく私を離れたがらない彼から、自分をひきはがすようにして私は別かれた。でも、カバンの中の大金は白日夢のように私の記憶に残った。これが去年の秋の末の事だった。

師走に入って、新聞にけっこう大きな記事が出た。サギで捕まった男の話だ。途中までは私の経験と同じ。だが誘われて従って行った人がいた。そしてこう云われた。

「もう一度、八百長レースの情報をもらう約束がある。一口乗らないか」

誘われた人はうかうかと数十万円を男に渡して、馬券を買ってもらう事にしたらしい。当然金は戻ってこなかった。

さて、サギ男の顔、体形など今になるとどうも思い出せない。ごくごく平凡な様子の男だったのだ。考えてみれば、平凡な容姿だから、このサギは成立するのかもしれない。ともあれ、ウマイ話には乗らない事だ。